九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

中島広足往来抄(三)

白石, 良夫
純真女子短期大学講師

https://doi.org/10.15017/16287

出版情報：文獻探究. 5, pp.22-28, 1979-12-05. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

中島廣足往来抄（三）

白石良夫

〔三〈承前〉〕岡部春平・轟広淵・高岡某・光千別・近藤光輔・本間素当・長瀬真幸・一柳千古・古人・北島清之助・河上健雄・代継宮・和田厳足・吉永秀雅・吉永直雄

37 岡部春平・轟広淵

文政五年秋、春平におくるせうそこ。たちわかれぬるのちは、行かふかりにつけても音づれ給はね［ば］、こゝろもとなくてのみ過し侍りつる（ぞを）、こたび御せうそこ給はれ［る］は、うれしといはんもよのつねになん。されど神無月にかゝせたまへるよしなるは、なほいとはるかにてこゝろもとなきを、広淵がものがたりに、いとたひらかにておはすなるいまの御ありさまも、くはしうきゝ、あきらめてなん、かへす〳〵もよろこぼひ侍る。さるは（けさる）は、其くにゝすみつき給へるさまにて、御をしへたふと（とみむける）人（どもの）おほく出来ぬるとか。道のひらけゆかんこと、よろづよりもうれしくなん聞ゆるもさらなれど、いかでおこさらせ給（す）はずいざなひみちびきたまへ。さて御せうそこにのたまへるごとく、こぞの夏はのどかにものし給ひながら、あつきさかりにて、うちとけたる御ものがたりもおもふばかりは（え）聞えさせず、こゝかしこのせうえう、はたこゝちにのみおもひたゝれながら、物うくのみしてうち過しつるは、かへり給ひてのちなん、いと〳〵くちをしうおもう給へられし。されどかのこゝちにこめし一ふし、わくらはにうら出でしにおなじ御こゝちなりしは、かつ〳〵むねあきぬるこゝちして今（だに）（だにへ）うれしきを、かの序とてかき給へるはいつしかとまち侍るを、こたびのたよりにだになほおこせ給はぬは、うらみ聞ゆべきふしにこそ侍れ。かの春臣が論ひも、文のさまなほあしければ、書なほしてとおもひながら、今に筆をもおこし侍らず。さるはおのれ野坂のうらの行かひもはやくとゞまりて、今はにしのやまかげにこもり居はべり。かくなすこともなくて、ついにおひはてなんことのいとほいなきを、いかにかひなき身とおもひくだし給ふらん。あはれ玉づさの行かひだに、たえず聞えかはし侍らばやとなんおもひ給ふる。まことやいひもらしてけり。かの川尻のさとなるをとめよ、ありし後おとづれ侍りつるに、君の御うへのみかたり出て、又いつかはたいめあるべき（き）など、いとまちがほなるさまなりし（ども）（は）、いとわれにくおもひあは（さるる）るゝことも侍り。又今の御すみかにながくとゞまりたまはゞ、かの千よの松原もいかにまち聞ゆらんと、おしはかり聞（きこす）ゆるもあぢきなの物あつかひやと、いかにゝくませたまはん。こたびはいそぎ侍れば、よろづ（ども）又のたよりに［も］聞ゆべし。あなかしこ。

神無月朔日の日

辻のかなの考、いかゞ侍らん。よく見給ひて、ひが事侍らばしめし給へ。其御もとにめでたき考もおほく侍らんを、ついでに書つけて見せ給へ。又ひ（とろ）ひあつめたまはむ。御ことばの玉をも。　（三六オ〜三七ウ）

日付の文政五年は去年。十月一日は初度長崎行の直前であり(1)、右はそのときにしたためた書翰の写しである。春平はその前年文政四年七月に熊本に来て広足と面識を得た(2)。文中「たちわかれぬるのちは云々」・「こぞの夏はのどかにものし給ひながら云々」はそのときのことを指す。その後、春平は翌五年春より長崎に移り住んでおり、このことを轟広淵

が広足に報せたのであった。『夢路日記』にはその間の事情が次のごとく記されている。「いにし月のなかば、轟広淵がゝしこにいたりてかへりきてものがたれるをきくに、ちくぜんのくになる岡部春平なん、此春のはしめつかたよりかしこにいたりて、やがて其ざとにすみつきにけりといふに、たより出来ぬるこゝちすれば、そをとぶらはんとおもひたちてにはかにたびよそひす」。

轟広淵は熊本における広足の門人であろうが、伝未詳。文中「かの春臣が論ひ」は未詳。「にしのやまかげにこもり居はべり」は、広足が文政元年から住んでいる島崎の里のこと。尚々書の「辻のかなの考」に対する春平の答が、草稿本『橿園随筆』巻二に載っている③。

38 高岡某

蓬莱石記

石あり。島山のかたなせり。人すむべきやにはあり。田つくるべきくぼあり。畑つくるべきふところあり。うしかふべき原あり。馬はなつべき野あり。松さかゆべき峯あり。梢しげるべき谷あり。水わくべきほらあり。滝おつるべき岸あり。あみ引べき磯あり。つりたるべき岩あり。舟よすべきかげあり。かくて花をめづべき岡、月を見るべきさきさへぞある。かげともそとも、こなたかなた、すべてとりよろぼぬ所なく、たりそなはらぬかたちなし。ほ（た）れぞ、かのかめのせにおふいちひこの山ともいひつべきさまなる。かくとりよろひ（なれば）、たりそなはりたる石の大きさはたゞ一すばかり（かけて）、たなうらにすゑてめづるにあへたり。かれ此石をにしきのふくろにいれ、朝よひ[い]なだきにさゝげ（けい）、旅ゆくにも身をはなたず、たふとみうむがしみめでよろこぶ人は、肥の道のしり熊本のさとなる、こもまくら高岡のなにがし、其島に住てふ仙人にあへ（え）たる翁なり　（三七ウ〜三八オ）

この文章は、のち『文詞』で大平の添削を受け④、『橿園文集』第一集に「高岡某がもたる奇石にかきてそへける詞」の題で収められている。高岡某、未詳。

39 池千別

近水楼記

橘千別が家を近水楼と名づく。其名のゆゑよしをおもふに、庭ぬちに池あり。しめの外に川ながれたり。かれ（此其）池と川とによりてしもぞ名づけつらん。池はうなばらなせるひろきにもあらず、にはたつみなせるあさきにもあらず、いとよきほどにつくりて、いとよきほどに水をたゝへたり。川はさかまくなみのおどろ〳〵しきにもあらず、岩つたふしづくの[た]え〴〵なるにもあらず、いとよきほどの川にて、いとよきほどのみづながれ[お][ち]たり。池はなみのあやこまやかにて、松のかげにかめあそび、川は瀬々のとさやかにて、岩のひまにうをひれふる。此家あるじ歌（たかどのにのぼり）よみ文つくいとまのひまには、池にのぞみ川にむかひてこゝろをなぐさめ、おもひをやり、歌によび、文つくりて月花のみやびをつくせり（すぐす）。かれ（此則）池と河とによりてしもぞ名づけつらん。いとみやびたる家の名、いとみやびたる家あるじ。（三八オ〜三八ウ）

この年（文政六年）五月から七月にかけて、広足は長崎に滞在している⑤。六月二日以降、広足は千別の家に寄宿して、その楼の記をしたためて壁に貼った。『後夢路日記』にその時の文章があり、右の文章はそれを推敲したものであり、のち明治二十五年、活版本『橿園文集』に集録された。

池千別は未詳。『後夢路日記』には、「吾友橘千別は、其氏池といへるをもてにはに池をつくり」とある。広足の長崎での定宿の一つであったらしい。真幸門の中山千別⑥とは別人であろう。

40 近藤光輔

光輔があたりをおもひやりて

こよひたれあきのうらわにうち出て浪の千里の月を見るらん　（三八ウ）

右を含めて三首並ぶ。八月十六日と十八日との間。長崎か

ら帰って暫くしてからである。

41 本間素当

九月つくる日にもとますにいひやる
いとゞしくあれ行いほに此冬のみねのあらしをいかにし
のがむ
冬にゝむみねのあらしのはげしさをおもへばさらにをし
き秋哉。（四〇オ）

42 長瀬真幸

江戸に長瀬ぬしのもとにいひやりける
いたづらに過しやはてん神無月四方のもみぢのにほふ盛
を（四一オ）

右を含めて三首並ぶ。四十丁ウラからここまでは「神無月十二日」の日付のもとに詠まれたものである。このとき真幸が江戸に滞在していたことについては前号（三）30を参照。真幸は翌年五月まで江戸滞在⑦。

43 一柳千古

一柳大人へ
もしほ草かくて月日をすぐしつゝ我世つくしのあまとな
るらん（四一オ）

十月十九日と二十九日との間。千古は、本姓は越智。稼山・章堂・松花堂などと号す。宝暦十年江戸に生れる。広足より三十二歳の年長。八丁堀北嶋町に住し⑧、加藤千蔭に歌を学び、その三傑と呼ばれた。天保三年十二月二十二日没、享年七十三。家集『章堂翁家集⑨』の他に『野州紀行⑩』などがある。広足は公務で江戸に滞在していた文化十年ごろ、すでに千古門であった素当に誘われて千古に入門し、それをきっかけとして、二条家歌学から脱皮するのである⑪。

44 岡部春平

霜月ばかり春平に贈る歌　春平が父の身まかりて
かきくらししぐるゝ此（空）のひまなきにぬれ（が）そふ袖（にぬれそふたもとな）をおもひ
こそやれ（るらん）
おなじ人に
むかし君とひしながらの草のいほあれぬるほどをおもひ
やらなん（四一ウ）

十一月十一日付の歌の前にある。

45 一柳千古・本間素当・古人・北島清之助

十二月廿一日
一柳大人へ送るせうそこ
いとさむきころほひ、たひらかにおはしますらんこそま
づうれしけれ。とじ君にもおなじさまにて過し給ふらん。
御をしへ子たちいよゝすゝみ給ふなるべし。こゝにて春
臣事なく過し、素当・古人直まじらふごとに、御あたり
しのび侍り。いにし月よりは、いもうとを肥前国長さき
に北島何がしがもとにとつがしむとて、春臣事はかりつ
れば、あまたゝびの行かひいと事しげくはべりて、其御
あたりの事うと〳〵しく、せうそこも聞えさせず、心お
こたりのつみさり所なくなん。今は春臣が出たちもいと
〳〵かたくのみ成行は、よろづよりもなげかはしきわざ
にこそ。長さきにと、にしのかたに出たちける道にて、
うちそむき行につけても恋しきはたゞ東路の空にさり
ける
くはしきさまは春日のとがにこそ。あなかしこ。
東路の空にも君をこふる哉身はにしにのみうかれ出つ
ゝ（四一ウ～四二オ）

広足は十一月十五日から翌十二月十四日まで長崎に行っていた。今回の長崎行きは、妻の実妹とみの縁談のためである⑫。文中「いにし月よりは云々」はそのことを指す。この広足の書翰に対する返事と思われる千古の書信が、弥富氏『中島広足』に引用されている。「（上略）そも〳〵御令室様、御妹子様を貴君御妹分に被成、長崎北島清之助と申仁へ御縁組御坐候旨御安意の事、目出度奉存候（下略）」。⑬

この年二月、広足は千古に会うために江戸行きを試みたが、結局、途中で引返さざるを得なかった⑭。文中「其御あたりの事うと〳〵しく云々」というのは、そのことである。ただし、北島清之助・古人については知るところがない。

46 河上健雄

　正月十二日、河上健雄が家に小集　子日

初春の初子をいはふやどにしもまづひかるゝはこゝろせけり

かはかみのゆつのいはむらに生る松うごかぬ御代のねの日にぞ引　（四三ウ）

年が改まって、四十三丁オモテから文政七年である。右は新年の歌会であろう。他に「同日当座」として「苗代蛙」「落花如雪」「逢後増恋」「春駒」の各題で詠じた八首がある。

47 代継宮

社頭梅　（代継宮宿題。正月十二日）

みづがきのうちにゝほへる梅花色をもかをも神ぞしるらん　（四四オ）

右を含めて四首、および「同日当坐」として「顕恋」「暁鶏」の各題で詠じた四首がある。代継宮は本荘町にあり、紀貫之・住吉大神を奉祀した和歌にゆかりの神社。天明二年以降は藩祖細川幽斎の威霊もここに祀った⑮。

48 和田巌足（？）

春浦　（和田勧進、十題歌合）

朝ひらきこぎ出る船そ（の）ほの見えて霞にしづむ月の浦船　（四四ウ）

右の題の他、「嶺上花」などの十題で詠じた歌が十二首並ぶ。

49 吉永秀雅・吉永直雄

連載第一回の本項5に挙げた吉永秀雅を、「直雄の子か」としたが、詞書から判断するなら、むしろ直雄の養父かとすべきであろうか。本居宣長記念館所蔵の『熊本社中本居大人追悼歌集』・『花祭歌』に「藤原秀雅」の名でそれぞれ二首づつ詠んでいるのは彼のことであろう。両書とも、高本紫溟を中心とした熊本社中による宣長追悼歌集である。前者は冒頭の紫溟の詞書に、「本居大人みまかりまして三とせといふとしの九月廿九日その日なりければ、ふみをひらきてむかしを思ふといふこゝろを、人〳〵うたよみて手向けるついでによみ侍りける」とあって、文化元年の宣長命日の日に詠みあったもので、年代的にも秀雅が養父であった方が都合がよい。同日もよおした催馬楽で秀雅は笙の笛を奏している。また、『花祭歌』には「源直雄」の名も見える。

以上が『詠草』に出てくる全人名である。該書はいわゆる歌日記であり、1と37を除けば、すべて日次にそって書かれている。すなわち、2〜27が文政五年、28〜45が六年、46〜48が七年、ということになる。ちなみに、文政五年は広足三十一歳である。

〔四〕長瀬真幸・西田秋実

諏訪文庫蔵『雑問答考』（賀茂真淵著）は大本一冊の写本。その奥書に、

寛政五年八月十六日以平春海本校合了　長瀬真幸
文化十一甲戌年九月三日以長瀬真幸本写之卆　中島春臣
天保十四卯年九月廿四日写之卆　西田秋実

とある。西田秋実については詳しく知ることを得ないが、長崎における広足の門人で、堅吾⑯また守輔⑰と通称する。その歌が『類題鴨川集』に入集している。広足の『詞の玉緒補遺』（安政五年刊）にも序文を贈っている。丸山季夫氏によれば、静嘉堂文庫所蔵の『瓊浦集』には「瓊浦集人名之内」と題した人名録が付されており、それには秋実のことを「町年寄高島四郎太夫家来」と記している⑱。高島四郎太夫とは砲術家高島秋帆である。

〔五〕長瀬真幸

諏訪文庫蔵『安売の美柱』・『名字反切辨』は二著を合綴した大本一冊の写本。いずれも長瀬真幸の著述を広足が書写したもの。奥書は、

右之一条者長瀬翁依島田某之需所書記也。予乞其草本謄写。文化十二年十一月二日　中島春臣

また、

こは田廬のおきなの島田某のもとめによりて著されし也。
文化十二年十一月二日、
白川のいほにしてうつしとりぬ　中島春臣（花押）

『安売の美柱』は上代における近親結婚の風習について論じたもので、一名「上古嫁娶辨」とも言い、「文化の十まり二とせといふとしの九月の四かの日」という真幸による日付がある。該書には広足の書入れがあり、広足は後年文久元年六月に『上古嫁娶辨附録』を著す(19)。『名字反切辨』は、人名の文字に韻鏡の反切を用いることの非を説いたもの。

〔六〕長瀬真幸

諏訪文庫蔵『出雲国風土記意宇郡古文解・伊勢物語作者考并辨論』は半紙本一冊の写本。前者は本居宣長の著、後者は作者考が海量、辨論が長瀬真幸の著書である。前者の奥書には、

文化十四年十二月六日写之　中島春臣
原本長瀬氏所蔵。按此考出于王勝間。

とあり、後者のそれは、

文化十まり三とせといふとしのきさらぎ廿日まり六かの日にうつしをへぬ。　中島春臣（花押）

である。

〔七〕長瀬真幸

諏訪文庫蔵『鈴屋答問録』は半紙本一冊の写本。「波留於美」の蔵書印があり、奥書に、

文化十三年三月廿二日以長瀬氏所蔵本写之畢　中島春臣

とある。

〔八〕長瀬真幸・西田秋実

諏訪文庫蔵『県居翁消息応要稿』（村田橋彦編）は大本一冊の写本。奥書は、安永五年六月五日の稲掛茂穂（大平）のものにつづいて以下のごとくである。

寛政五年十二月廿六日於江門以右稲掛本令写了　長瀬真幸
文化十四年正月九日の夜、燈のもとにてうつしをへぬ。おのれはた一文字もさかしらをくはへず本のまゝになん　中島春臣
弘化二年四月十四日写　西田秋実

〔九〕長瀬真幸

諏訪文庫蔵『金槐和歌集』は貞享四年刊本。半紙本、三巻三冊。各冊表紙見返しに「中島所蔵」と墨書、また巻頭に「橿園蔵」と朱書する。本文には朱書入れがあり、奥書に、

寛政十年六月以岡本原大宮司日野雄足校本校之畢　長瀬真幸
文化十四年四月十日以長瀬氏校本校之畢　中島春臣

とある。

〔十〕長瀬真幸

諏訪文庫蔵『日本総国風土記（残巻豊後国）』は大本一冊の写本。奥書は(20)。

（上略）
寛政八年正月十八日写　松田直之
此篇淡海国僧海量得（於）豊之後川岡郷人蔵(21)緝子(ママ)子則□松田直之令謄写□
寛政八年二月廿七日　長瀬真幸（花押）
文化十四載（年）五月念日以長瀬氏所蔵之本写于竹亭　中島春臣（花押）

【註】

1　前号〔三〕22参照。十月二日に高橋に着く（『詠草』一八ウ）。翌三日に湊から船で島原に向かう（『夢路日記』）。

2　弥富破摩雄氏『中島広足』四三頁。

3　『中島広足全集』第二篇所収。春平は、「辻の仮字は、ツヂと書べし。ツドヒミチの略にて、ツヂのヂは路の義なるべし」と答えている。

4　〔一〕参照。

5　『後夢路日記』（『中島広足全集』第一篇所収）。なお、『詠草』にはこの箇所に、「此間旅二行。紀行アリ。ナガサキせ」という書入れがある。

6　弥富氏『中島広足』四七頁。

7　『熊本藩年表稿』によれば、藩主斉樹公の一行は文政七年五月十五日に江戸を出発。真幸もそれに随って帰熊した。

8　『諸家人名江戸方角分』（中野三敏先生編）

9　国会図書館所蔵本は本間素当および広足の書写になる。

10　国会図書館所蔵本は広足の書写。

11　弥富氏「御小姓役時代の中島広足」（『国学者研究』所収）・拙稿「中島広足の歌風」（『語文研究』第四十三号）

12　『浦のしるべ』（『中島広足全集』第一篇所収）。『詠草』には、この消息文のすぐ前に、「十五日より長さきに行。十二月十四日かへる。此あひだ紀行あり」と書入れがある。

13　『中島広足』五五頁。

14　この時の紀行『ふなぢのなやみ』（『中島広足全集』第一篇所収）冒頭に、「一柳大人のもとに、大江戸に物学にものせんとおもひ立ぬるも、はるけき道におもひたゆたひて、心のうちにのみとしへにけるを、去年の秋におもひおこしつる。又さはらふことありてとゞまりぬ。さて此春を過しなば又いつかはと、しひておもひたつは二月の末つかたになん」とある。

15　『肥後国誌』巻四。

16　弥富氏『中島広足』九九頁。

17　安政五年刊『国学人物志』。

18　『江戸長崎談叢』第四巻二号。

19　『中島広足全集』第二篇所収。

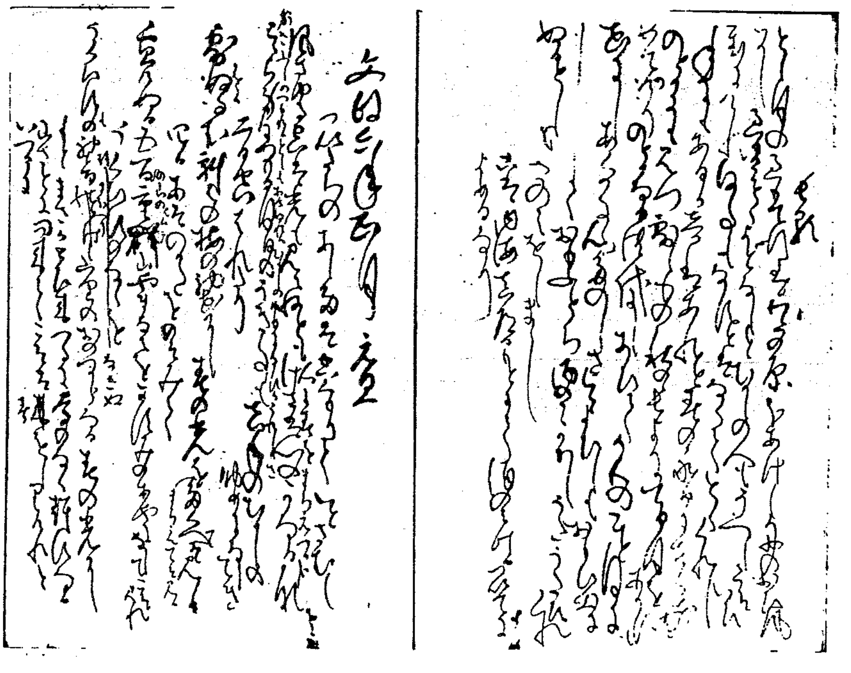
20　広足は、元の奥書を忠実になぞって書写しているらしく、ために判読困難な文字が数箇所ある。

【索引】

ア
青木永章　〔二〕
池千別　〔三〕39
井芹某　〔三〕15
芋粟園　〔三〕11
上野光考　〔三〕32
内海真道　〔三〕27
大石真麿　〔三〕26 33
岡部春平　〔三〕22 23 37 44
岡松某　〔三〕8
カ
河上健雄　〔三〕3 46
北島清之助　〔三〕45
木山直秋　〔三〕2
近藤光輔　〔三〕22 40
サ
浄土寺　〔三〕16
浄妙院某法師　〔三〕13
タ
高岡某　〔三〕38
高本紫溟　〔三〕7
竹林某　〔三〕17
知足寺　〔三〕9

	吐月亭	（三）	$\boxed{20}$ $\boxed{31}$
	轟広淵	（三）	$\boxed{37}$
ナ	長瀬真幸	（三）	$\boxed{18}$ $\boxed{30}$ $\boxed{42}$ （四）（五）
	楢林公足	（三）	$\boxed{22}$
	西田秋実	（四）	（八）
ハ	一柳千古	（三）	$\boxed{43}$ $\boxed{45}$
	藤崎宮	（三）	$\boxed{13}$
	古人	（三）	$\boxed{45}$
	本間素当	（三）	$\boxed{6}$ $\boxed{10}$ $\boxed{14}$ $\boxed{24}$ $\boxed{25}$ $\boxed{28}$ $\boxed{29}$ $\boxed{36}$ $\boxed{41}$ $\boxed{45}$
マ	みすず子	（三）	$\boxed{23}$
	明円寺	（三）	$\boxed{12}$
	本居大平	（一）	（二）
ヤ	横田厳正	（三）	$\boxed{35}$
	吉永直雄	（三）	$\boxed{4}$ $\boxed{44}$
	吉永秀雄	（三）	$\boxed{5}$ $\boxed{44}$
	代継宮	（三）	$\boxed{47}$
ワ	和田厳足	（三）	$\boxed{1}$ $\boxed{15}$ $\boxed{21}$ $\boxed{31}$ $\boxed{34}$ $\boxed{48}$
	和田亭	（三）	$\boxed{19}$

——純真女子短期大学講師——



（『自文政五年至同七年詠草』二四丁ウ・二五丁オ）